

「第二の戦場」のモダニズム

荒木 映子

Modernism in “The Second Battlefield”

ARAKI Eiko

## 要 旨

第一次世界大戦についての歴史研究は、戦場や戦闘体験に力点を置き、非戦闘員が銃後で味わった苦悩や、女性が戦地で行った看護婦や救急車運転手の仕事は、いわば「記憶喪失」の状態に置かれてきた。本論は、西部戦線の野戦病院で看護婦として働いた二人のアメリカ人女性の体験記を、「シェル・ショック」の文化史と関連させながら、モダニズムの系譜の中に位置づけようとする試みである。

イギリス人女性だけでなく、アメリカからも多くの女性が、アメリカが参戦する前から、海を渡ってヨーロッパの戦場でヴォランティヤとして働いていた。エレン・ラ・モットとメアリー・ボーデンは同じ野戦病院で働き、戦場から運ばれて来る「人間の残骸」と化した傷病兵を看護した経験を、独特の文体と形式で表現している。感情をまじえず、単調な繰り返しを用い、モンタージュのように断片をつなげる手法は、モダニズムのキャンノンに直結すると言える。病院は、言わば「第二の戦場」で、看護婦達が患者を守って戦う場であり、ここで戦うためには、巨大な「戦争機械」の一部に組み込まれ、無感覚な自動人形となることが必要であった。

「無感覚」は、神経がまいらないようにするための防御装置であると同時に、それ自体が大戦中に兵士の間で蔓延した「シェル・ショック」の症状と言えるのではないだろうか？もともと男の病氣とされた「シェル・ショック」は、医学的、文化的にいろいろな意味づけをされてきたが、男女を問わず戦争や災害等をきっかけに発症するものであるという認識が変わってきている。大戦時の医療・看護従事者のトラウマについての研究も始まり、フェミニスト達からは「もう一つのトラウマの歴史」が提唱されている。

戦闘員が経験したのと同じようなショックがきっかけとなって、看護婦達は、悪夢のような体験を表現する新しい言語と形式を見出そうとした。大戦のトラウマ経験を文学と芸術の歴史に位置づけてみると、それは、大戦前の世界に対するショックと幻滅からすでに始まっていたモダニズムやアヴァン・ギャルド運動を加速化させたと言えるし、二人のアメリカ人女性の作品もその系譜の中に含まれることは間違いない。

**キーワード：**第一次世界大戦、記憶喪失、記憶過剰、モダニズム、看護婦、シェル・ショック

## Abstract

Some facts about the First World War have been much discussed, and some left in a state of 'amnesia'. The battlefield and the direct experience of battle have been the centre of attention, while civilians' agony on the home front and women's contribution to the war effort as nurses and ambulance drivers have long been neglected.

Not only British women but, surprisingly, quite a number of American women crossed the sea to do volunteer work in Europe even before America entered the war. Ellen la Motte and Mary Borden worked as nurses in the same field hospital on the Western Front and both wrote memoirs about their horrifying experiences when tending maimed soldiers. They fought in 'the second battlefield', feeling incorporated into the war machine, to the extent that each felt that she was a complete automaton. Both American women produced a very Modernist-style narrative which used fragmentation, flat repetition, irony, and dehumanization, but their writing has not been paid much of the attention it deserves.

'Shell shock', the term given to the cases of mental and physical breakdown prevalent among soldiers in the First World War, has a long medico-cultural history, but it was considered specific to men. Wartime trauma was a privileged masculine experience. Recently, however, another history of war-induced trauma has been proposed by feminist critics. They insist that noncombatant medical and nursing staff who worked near the front were also exposed to extreme fatigue, breakdown, and paralysis. If the battlefield embodies both the sublime aspect and the abominable aspect of war, 'the second battlefield' has only the latter.

Nurses' writing, triggered by shocks similar to those experienced by combatants, strove to find a new language and form to express their nightmarish experiences. Their literary attempts are comparable to canonical Modernist writers' experiments at portraying their disillusion with the modern world, a disillusion which the First World War accelerated.

**Key words:** the First World War, amnesia, hypermnesia, Modernism, nurses, shell shock

## 序

後に「第一次世界大戦」と呼ばれるようになった戦争を本質的に仏独の対決にとらえ、両国の歴史家が初めて共同で執筆した本『仏独共同通史 第一次世界大戦』が、2008年にフランスで出版された（日本語訳の出版は2012年）。この本の第十二章「民間人に対する暴力」で、次のような指摘がなされている。

戦争についての歴史研究は長い間、特定の民間人の運命を深く掘り下げることにはなかった。このような歴史研究を文字通り再創造したのが、最近の歴史研究者たちであり、民間人が被った暴力を重視する彼らは、これまでの研究状況を…民間人の苦痛に関する「記憶喪失」(amnésie) とまで述べている。彼らによれば、「戦闘員の苦痛に関する肥大した記憶とは対照的に、第一次世界大戦の民間犠牲者の扱いに関する記憶喪失は、心理的抑圧の中に刻み込まれている」。すなわち、戦争がもたらした暴力の心理的抑圧である。一方に記憶過剰 (hypermnésie)、他方に記憶喪失が存在していたのである。<sup>1)</sup>

著者の一人ジャン・ジャック・ベケールは、「記憶喪失」を民間人が被った肉体的・精神苦痛に限定し、ドイツ軍のベルギーとフランス北部での「残虐行為」や家屋や公共建造物の物理的破壊だけでなく、身内の兵士の消息を日々待つという「真綿で首を絞めるような拷問」<sup>2)</sup> や、戦争孤児、寡婦の問題を含めている。しかし、このような銃後の人々の苦痛だけでなく、軍需工場や前線で働いた女性達、ヨーロッパ本土以外の英仏の植民地、あるいは日本やトルコの戦争への関与も従来あまり顧みられてはこなかった。本稿では、「記憶喪失」「記憶過剰」という分類を借りて、大戦について何が忘れられ、何が記憶され語られているかを再検討することから始めることにする。その上で、「記憶喪失」にあたるものとして、野戦病院で働いた女性達の手記を比較検討し、モダニズム的な手法を持っていることを明らかにし、「シェル・ショック」の文化史の中でモダニズムを再考する。

### I.

戦争についてまず「記憶過剰」の範疇に入るのは、戦場体験である。クラウゼヴィッツの『戦争論』から来た陸・海・空の「戦域」を表す“theatre of war”が、英語ではよく使われるが、ここでの実際の戦闘体験がまず取り上げられてきた。第一次世界大戦では、その中でも、地域としては、北フランスからベルギーにかけての西部戦線の塹壕という極めて限定された範囲が最も語られることの多い領域であった。しかも、そこで活躍した、植民地よりはヨーロッパの軍隊、階級的には、兵卒よりは将校の声が従来研究の対象となってきたと言ってよい。近年、植民地から召集された黒人兵士やインド兵、軍隊をサポートするために中国からイギリス軍に召集された肉体労働者についての研究もポストコロニアルの批評動向の流れの中で始まり、<sup>3)</sup>

1960年にロンドンの帝国戦争博物館は退役軍人や一般市民へのインタビューをオーラル・ヒストリーとして残す計画に着手している。しかし、何と言っても、西欧の歴史家が扱ってきたのは、ヨーロッパ中心史観にたった大文字の第一次世界大戦の歴史であったし、女性の戦時貢献や東部戦線は添え物として扱われるのが常であった。歴史記述も人種、階級、ジェンダー等による偏見がからんでいたと言える。第一次世界大戦についての古典となったポール・ファッセルの『大戦と現代の記憶』(1975)は、男性作家達の戦争の記録がいかに人々に記憶を植え付けたかを論じている。ヴァージニア・ウルフがところどころ触れられているだけで、女性作家についてはほとんど言及されていない。

“theatre of war”で主役の座を占める兵士のイメージは、キリストの払った犠牲や、祖国愛、名誉と結びつけられて、戦争初期には戦意高揚の喧伝に利用された。イギリスでは、作家や詩人達がペンによってプロパガンダ活動に貢献し、開戦と同時にウィリアム・ワトソンやロバート・ブリッジズは士気を鼓舞する詩を『タイムズ』に発表している。また、極秘の「戦争プロパガンダ局」がつくられ、1914年9月2日には、トマス・ハーディー、アーノルド・ベネット、コナン・ドイル等著名な25名の作家が集められて、イギリスの国益をはかるために連合国や中立国への協力を求める文筆活動をすることが取り決められた。イギリス政府が望んでいるような内容の作品が出版社との協力のもとに送り出されたのである。ルーパート・ブルックの『1914年』というソネット集は、ガリポリ遠征に行く途上で1915年4月23日に彼が病死すると、たちまち評判になった。中でも「もし僕が死んだら、このことだけを考えてほしい」で始まる「兵士」という詩は、イギリスのために死ぬことを美化し特権化していて、政府の首脳部はこの詩のプロパガンダとしての価値を直ちに認め利用している。ブルックの死の一月後に戦傷死したジュリアン・グレンフェルが書いた詩「戦いの中へ」は、「戦いの喜び」を謳い、戦争中とその後しばらくの間、ブルックの詩と同じくらい有名になった。こうした戦争初期の英雄的、自己犠牲的、ロマンチックな理念は、休戦後夥しい数の兵士像の記念碑をヨーロッパ各地に建立させることになる。サミュエル・ハインズは、これらの記念碑が語る戦争の理念を「大言壮語の言説」“discourse of Big Words”に属する、と述べている。<sup>4)</sup>

しかし、現在イギリスの戦争文学のキャノンを占めているのは、厭戦的、反戦的傾向をもつ作品である。戦争の悲哀を謳ったウィルフレッド・オーウェンや風刺的なシゲフリード・サスン等、直に戦場を体験した将校階級が書いた詩、手記、エッセイ、自伝、(自伝的)小説、戯曲である。これらの文学は一様に「記憶過剰」に分類され、オーウェンは、文学史的には、ロマン派からジョージアン詩へのイギリスの伝統的な詩の流れに直結していると考えられる。もう一つ、「記憶過剰」に属する文学の系譜は、戦争に行かなかった(あるいは行けなかった)D. H. ロレンス、T. S. エリオット、エズラ・パウンド、ヴァージニア・ウルフ、ガートルード・スタイン等のモダニストに分類される作家達である。モダニズムは、第一次世界大戦が加速化させた、モダンの世界への深い喪失感と絶望感から生まれたものであり、モダニスト達の作品には直接的、あるいは暗示的に大戦の影響が影を落としている。

このモダニズムの系譜に最近、第一次世界大戦中に野戦病院で看護婦をした女性達が書いた作品を入れる説がフェミニスト批評家達から出ている。女性達の戦時貢献は、「その他の戦闘

員、その他の前線」(*Other Combatants, Other Fronts* とは、最近出版された第一次世界大戦の論集のタイトル)<sup>5)</sup> と並んで、「記憶喪失」の部類にとどめられてきた。しかし、イギリスの女性達は、出征した男性達に替わり、銃後に留まって農作業やバスの運転や工場での労働に携わるのみならず、陸軍省が許可を与える前に前線に出て行って、医療、看護、救急車運転、雑役等の職務について自主的に戦時貢献を行っている。チャリティの精神が根付いているイギリスだからだろうか、中流階級以上の女性達は、「患者輸送看護婦部隊」(FANY: First Aid Nursing Yeomanry, 1907-)、「救急看護奉仕隊」(VAD: Voluntary Aid Detachment, 1909-)、「聖ヨハネ救急車協会」(SJAA: St. John Ambulance Association, 1877-)等に属し、奉仕活動にこぞって参加したし、労働者階級の女性達は給料をもらって、「婦人陸軍補助部隊」(WAAC: Women's Auxiliary Army Corps, 1917-18)に加わり、前線で事務員やコックのような仕事にあたった。アメリカでも、1917年5月にアメリカが参戦する前に、政府の反対をもとめず、子供さえ残して、実に2万5千人に及ぶ女性達がヨーロッパに渡って救援活動を行っている。<sup>6)</sup> アメリカの黒人女性は、米赤十字で受け入れられたが、国内の後方基地病院や駐屯地で黒人兵士の看護を任されたただけであった。<sup>7)</sup> イギリスの中流階級以上に属し教育がある女性達は、手記や、詩や、自伝、自伝的作品を数多く残しているが、同性愛等内容に問題があるとされて、発禁になったものもある。1980年代になって、これらの作品がフェミニスト系出版社から再版されるようになり、作品研究が始められた。「記憶喪失」という観点から言えば、女性の戦時貢献も階級によって階層化されていて、研究が進んでいるのは、記録を残している中流以上の階級が属した組織の方である。本稿では、フランスの野戦病院で働いた二人のアメリカ人女性が書いた作品と、イギリスから「救急看護奉仕隊」(以下VADと記す)の看護婦としてヨーロッパに派遣されたヴェラ・ブリテン (Vera Brittain, 1896-1970) を検討することにする。

## II.

まず、取り上げるのは、エレン・ラ・モット (Ellen N. La Motte, 1873-1961) と、メアリー・ボーデン (Mary Borden, 1886-1968) の二人の作品である。以下、二人の作品選集につけられたマーガレット・ヒゴネットの解説やその他の研究書を参考にして、二人の伝記の事項をまとめてみる。<sup>8)</sup>

ラ・モットは、ジョンズ・ホプキンス大学養成所出身の肺結核を専門とする職業看護婦。ガートルード・スタインと同窓であるが、スタインは医学の勉強に挫折しパリに渡って作家になった。ラ・モットは、1914年11月には、できるだけ前線に近い所で自分の技術が活かせる仕事がしたいと、パリにあるアメリカの病院で働くが、病院の体制を批判して、ボーデンが創設した第一移動外科病院へ移り、ポペリンゲ、イーブル、ソナムで働く。スタインの『アリス・B・トクラスの日記』には、「勇敢だが、銃声におびえる」ラ・モットがセルビアに行きたがっていたこと、ボーデンに出会ったことがきっかけでボーデンの病院で働くようになったこと、がごく簡単に触れられている。<sup>9)</sup> この病院での体験を、『戦争の引き波—アメリカ人看護婦の見た戦場の人間の残骸』(*The Backwash of War: The Human Wreckage of the Battlefield as Witnessed by an American Hospital Nurse*) に書き (各章の日付から、1915年4月から1916年6月にかけて書か

れたと判断できる)、1916年ニューヨークの出版社から出版された。その赤裸々な内容ゆえに英仏では販売されず、アメリカではよく読まれて版を重ねたが、アメリカが参戦すると士気を挫くとの理由で1918年発禁となり、1934年まで再版されなかった。この本は、自分の上司であった年下のボーデン (“The Little Boss”) に捧げられている。なぜこの病院を辞めたか不明であるが、本を完成してから1916年夏ごろに中国に渡り、阿片中毒についての本を六冊書き、撲滅運動のリーダーになった。

メアリー・ボーデンの方は、一時ウィンダム・ルイスの愛人であったこともあって、ルイスの書いた自伝的な『銃撃と砲撃手』や、ルイスの伝記にも多少言及されている。『銃撃と砲撃手』によれば、「新世界と階級差のない社会から来る魅力的な新鮮さ」がある、と評されている。<sup>10)</sup> シカゴの富裕な家庭の出身で、ヴァサール・カレッジを出てから、イギリス人と結婚して三人の子供を儲け、ロンドンに住む。ルイスやフォード・マドックス・フォード等アヴァンギャルド・サークルと交流があった。大戦が始まると、看護婦の資格はないが、フランスの赤十字にヴォランティアで入る。そこの医療体制に失望し、ジョッフル將軍にかけあって自分の資産で百床の病院を設立して、そこの病院長となる。勤務の合間をぬって書いた『禁じられた地帯』(*The Forbidden Zone*) の原稿を1917年出版社コリンズに送ったが、内容に問題があるととして出版されず。後に書き足した五編を含めて、<sup>11)</sup> 反戦的な内容の戦争文学が受け入れられるようになった1929年の「戦争本ブーム」に初めてハイネマン社から出版される。本は、フランス兵 (*poilus*) に捧げられている。その後、アンソロジーに入ることはあっても、再版はされず、2008年になってロンドンの小さな出版社から再版された。が、第三部の詩の部分はなぜか省略されてしまっている。戦争中に知り合った軍人と再婚し、第二次世界大戦でもフランスに救急車部隊を設立する。小説家でもある。

二人は、同じ病院で働き、同じように、傷病兵の看護にあたった。ラ・モットは、表題の「戦争の引き波」の意味を序文で次のように説明している。

強力な軍隊が通り過ぎた後に、醜悪なものが大量にはねあげられる。我々は、人類の進化の中の一局面、戦争という局面を目撃しているのだ。そして、そのゆったりとした前進は、浅瀬にヘドロをかき集める。これが戦争の引き波だ。それはとても醜い。(v~vi)

戦争を人間と世界との浄化作用と見るプロパガンダに対抗するように、戦争という広大な海が打ち寄せて引いていく時には、おぞましい滓を残すことを暴露し、戦争の現実を語ろうとする。

「女達と妻達」と題した章は、交戦地帯へ入ることが許された気晴らしのための女達がいることを皮肉をこめて語り、父権的軍国主義の欺瞞を嘲笑しているが、そこでこのように述べている。

戦争の高貴で英雄的で高揚した面を書く人は多い。私は、自分が見たもの、もう一つの面、引き波を語らなければならない。それらのどちらも真実なのだから。(105)

引いていく波が澁みに残すのは、副題にあるように、醜悪な「人間の残骸」であって、ラ・モットは容赦なく、戦争のもう一つの面、いわば“theatre of war”の舞台裏(“back of the scenes”)<sup>12)</sup>を明るみに出している。

ボーデンの本の表題については、「はしがき」に次のように説明されている。

私はこの断片を集めた本を『禁じられた地帯』と名づけた。それは、私が配属されていた、射撃地帯のすぐ後の狭い土地をフランス軍がそのように呼んでいたからだ。(3)

病院はベルギーやフランス北部内で移動したとしても、常にいたのはそれぞれの土地での「禁じられた地帯」であったという。アンジェラ・K・スミスは、“no man’s land”の後にあるこの(女性には)「禁じられた地帯」は言わば、“no woman’s land”であり、選ばれた女性だけが入ることを許された地帯であったと指摘している。<sup>13)</sup> 選ばれた女性達とは、性のない看護婦と、ラ・モットが「女達と妻達」で暴露している、売春婦達であった。

「盲目」と題された章では、次のように、病院のことを言いかえている。

これは第二の戦場だ。戦いは今これらの無力な男達の上で行われているのだ。この人達の本当の敵と今戦っているのは私達なのだ。(97)

簡単な応急手当を施されただけの重傷者が運びこまれてくる「第二の戦場」で主役を演じるのは、医者や看護婦となる。しかし、この戦場は、普通の人間の感情を押し殺さなければ勤まらない壮絶なものであり、看護を女性の天職ととらえる常識を大きくくつがえすものであった。それまでの戦争にはなかった高度な殺傷力をもつ大量殺戮兵器は、「人間の残骸」を大量に生み出した。第一の戦場にならばあったかもしれない英雄的側面はここにはなく、あるのは「大混乱」(3)である。ボーデンは大混乱の断片の印象を、そのまま断片的な文体と構成によって表わそうとした。

次の節では、「第二の戦場」で戦い、「戦争の引き波」を目撃した二人の看護婦の作品が、なぜモダニズムのもう一つの淵源と見なせるのかについて、具体的に検討する。

### III.

二人の文体の特徴を大まかに言えば、非人間化された病院の壮絶な戦いを物語るのに、共に皮肉を込めた単調な文体を用いていることが挙げられる。病院のおぞましい実態を淡々と感情を交えずに語っている。ラ・モットの方が、より単調で、短い文の繰り返しが多いが、正確に選び取られた単語が使われている。ボーデンは、緩急交えて、より洗練された文体で、詩的な挿話や、会話とト書きから成る劇形式、スケッチ風のものを取り混ぜて、変化を持たせている。共に病院の日常の断片をコラージュのように貼りあわせてただけで、時間軸に沿って話は進んでゆかない。また、前線で任務にあたったVADの救急車運転手の手記という体裁をとったエヴァドネ・プライスの『西部戦線異常あり…戦争の継子』(1930)は、省略、繰り返し、擬音

語を多用し、言語自体を破壊しようとするような過激な試みが見られる。<sup>14)</sup> このようなモダニストに通じる技法を使ったのは、壮絶な戦争経験が伝統的な表現や形式を超えてしまっていたからではないか、と考えられる。「女らしい」奉仕活動とされた看護も、救急車運転手という「男性的」な仕事も、第一次世界大戦の苛酷な現実を前にして、彼女達のジェンダー・アイデンティティを揺るがし、その体験を語るためには独自の革新的な書き方を要求するものであった。これらの女性達の試みをモダニズムの系譜に入れようとする仮説が、シャーロン・アウディットやジェイン・マークスやスミス等からあがっている。<sup>15)</sup> 戦争文学のキャンオンとなっている、従軍した詩人や作家には、モダニズムに位置づけられるような実験的な表現方法を試みた人（デイヴィッド・ジョーンズやウィンダム・ルイスくらいだろうか）が少なく、戦争に行かなかった作家達がモダニストとして文学史的に確立しているということは興味深い。これについては、後で再び触れることにする。

『戦争の引き波』の副題の「人間の残骸」がどのように描写されているか、ラ・モットの文体と語り口がわかるように、英語のまま一部引用する。

From the operating room they are brought into the wards, these bandaged heaps from the operating tables, these heaps that once were men. The clean beds of the ward are turned back to receive them, to receive the motionless, bandaged heaps that are lifted, shoved or rolled from the stretchers to the beds. Again and again, all day long, the procession of stretchers comes into the wards.... They are all that stand between us and the guns, these wrecks upon the beds. Others like them are standing between us and the guns, others like them, who will reach us before morning. Wrecks like these. (83-4)

これは、「インターヴァル」と題された挿話の一部で、生と死のインターヴァルに置かれた「残骸」は、生と死にはある尊厳を失い、滑稽で嫌悪を感じさせるものとして描かれている。病院の機械的な流れ作業そのままに、繰り返しを多用した単調な文が用いられている。その中には、一日中意味不明の落書きを紙に書いては、通る人に紙を渡し続けるものの言えない患者がいる。頭に入った砲弾の破片のせいで、半身が麻痺し、鼻からは黄色い泡を流し続けている患者がいる。そのベッドの上の壁には、勲章が空しく飾られている。同情や憐憫の情を抑えて、淡々と真実を明るみに出そうとしている。

『戦争の引き波』は全部で13のエピソードから成る。外科医としての評判をあげたくて、死にかけた重傷者の命を徒に長引かせようとする事、退院すればパリの通りを歩いて士気を高めてくれるだろうとのもくろみで、たいした殊勲もあげていない軽傷患者に軍功章を授与すること、義足に義手、最新の形成手術を施されて辛うじて帰還した息子が「パパ、殺して！」と叫ぶ「外科手術の成功」、等々欺瞞と矛盾に満ちた病院の現実をさらけ出している。病院も社会的な死の機構に加担していることを告発し、戦時の看護業に幻想を抱くことを戒めているかのようだ。ボーデンと共通するエピソードもいくつかある。パニックに駆られて自殺をはかっ



たが死にきれなかった男の話の二人とも書いている。ボーデンの、「ロザ」という名前を呼び続ける自殺未遂の男は、頭の包帯を取り続け、最後には死ぬのに成功する。ボーデンの場合は、この農夫らしき大男がなぜ自殺を図ったのかに関心を寄せている。ラ・モットの「英雄達」に出てくる自殺未遂者は、救急車から飛び降りようとしたり、出術台では暴れまわったりする手におえない患者である。軍法会議にかけて処刑されるために、壁を背に立つことのできる程度まで回復させることの倫理的なジレンマを、ラ・モットは「袋小路」と呼んでいる。

By expert surgery, by expert nursing, some of these [the most seriously wounded] were to be returned to their homes again, *réformés*, mutilated for life, a burden to themselves and to society; others were to be nursed back to health, to a point at which they could again shoulder eighty pounds of marching kit, and be torn to pieces again on the firing line. It was a pleasure to nurse such as these. It called forth all one's skill, all one's humanity. But to nurse back to health a man who was to be court-martialled and shot, truly that seemed a dead-end occupation. (7)

戦時体制に組み込まれた軍事病院の官僚機構は、健康が回復すれば、再び殺されるまで戦場に送り返すか、自殺未遂者の場合には処刑することを要求する。こうした無慈悲な病院の体制を、ボーデンは「陰謀」と呼び、病院を、ほころびができると戦線から戻ってくる男達を修繕する仕事場にたとえている (79)。

次にボーデンの『禁じられた地帯』から、いくつかのパセージを検討する。「月光」という挿話は、病院の夜の光景を詩的な文体で語り始めるが、徐々に、しじまを破って獣のような大砲のうなり声が聞こえることに移っていく。

Beyond the gauze curtains of the tender night there is War, and nothing else but War. Hounds of war, growing, howling; bulls of war, bellowing, snorting; war eagles, shrieking and screaming; war fiends banging at the gates of Heaven, howling at the open gates of hell. There is War on the earth—nothing but War, War let loose in the world, War—nothing left in the whole world but War—War, world without end, amen. (42)

月光の中に手提げランプを持って看護婦がやって来て、頭や足や腹等障害のある部位別に分けられた病棟に入る。「私」または「彼女」と呼ばれる看護婦は、特徴がなく、女でさえもなく、死んだも同然、あらゆる感覚を失っているという。そういう看護婦が相手にする患者は次のように描写される。

There are no men here, so why should I be a woman? There are heads and knees and mangled testicles. There are chests with holes as big as your fist, and pulpy thighs, shapeless, and stumps where legs once were fastened. There are eyes—eyes of sick dogs, sick cats, blind eyes, eyes of

delirium; and mouths that cannot articulate: and parts of faces—the nose gone, or the jaw. (43-4)

男性は身体の部位、断片に卑小化され、女性は、身体はそろっていても、感情も感覚もなくして、巨大な戦争機構 (war machine) の一部に組み込まれている。「禁じられた地帯」“no woman's land” は、普通の人間の感情を禁じられた場でもある。感情を押し殺し、機械的に病院の仕事をこなすことで辛うじて正気を維持している。機械の単調な動きそのままの文体はそれを表現するために選び取られた。戦争の神話が崩れ去り、出征する兵士達を讃えた「栄光や名誉や勇氣というような抽象的な単語」<sup>16)</sup> がまやかしであることがわかった時、具体的になまの現実を表わす言葉が選び取られたと言える。

自動人形のような看護婦が、壊れた機械のようになる場面がある。「第二の戦場」という言葉が出てくる挿話として前に触れた「盲目」では、すぐに手当を必要としない失明した患者 (包帯をされているので、まだ失明したことを知らない) を忘れて、他の緊急を要する怪我人の看護に追われ、「看護婦さん」と盲人に呼ばれて初めて我に返るという特に印象的なエピソードが語られている。

‘I thought,’ he [the blind] murmured in that faraway voice, ‘that you had gone away and forgotten me, and that I was abandoned here alone.’

My body rattled and jerked like a machine out of order. I was awake now, and I seemed to be breaking to pieces.

‘No,’ I managed to lie again. ‘I had not forgotten you, nor left you alone.’ And I looked down again at the visible half of his face and saw that his lips were smiling.

At that I fled from him. I ran down the long, dreadful hut and hid behind my screen and cowered, sobbing, in a corner, hiding my face. (103-4)

呼ばれるまで、エプロンを血まみれにし、目をらんらんと光らせて、夢の中にいるかのように、「人間の残骸」の処置に追われていた看護婦が束の間人間の感情を取り戻す瞬間である。ラ・モットの方は、最後まで憤りと告発に燃えて書いているように思われる。

#### IV.

1914年、大戦が起こった時にラ・モットは41歳、ボーデンは28歳である。ヴェラ・ブリテンは21歳で、オックスフォード大学に入学したところであったが、1915年の6月には学業を中断して、赤十字のVADの看護婦に志願している。フェミニズム教育を受け女性の自立を求めているブリテンであるが、戦争の勃発に際しては、義務感と国への忠誠から、伝統的な女性の役割を引き受けた。二人よりはるかに未熟で経験もなかったが、戦争が終わるまで看護婦としてロンドン、マルタ島、エタッブル等の軍事病院で働いている。その経験や、義勇兵として出征した弟や婚約者や友人達を失った悲しみを振り返り、『青春の遺言』(Testament of Youth, 1933) という自伝にまとめている。この本は、女性が書いた戦争体験記としては、異例の売れ行きを

示し、1978年にヴィラーゴ・プレスが再版を出してから版を重ねるベスト・セラーとなった。1979年にはBBCによってテレビドラマ化されている。この自伝のもととなった日記（1913年から17年まで）は、1981年ブリテンの死後に『青春の記録』（*Chronicle of Youth*）として出版されている。以下、この二冊の本から、ブリテンが看護婦の体験をどのように書いているかを検討して、ラ・モット、ボーデンと比べることにする。

戦争体験から時間を経て懐古的に書かれた『青春の遺言』と比べると、『青春の記録』には率直な心情がより鮮明に表現されている。ブリテンは、切迫した必要性から書いたこの偽らざる記録を出版して、後の世代に戦争がもたらす死や苦悩を知らせ、平和運動につなげていってほしいと考えていたそうである（‘Introduction’ by Alan Bishop, 17-8）。1915年10月から16年9月までは、最初の病院である、軍の第一ロンドン総合病院で働いた。『青春の記録』の1916年3月23日には、幾分扱いに慣れてきた負傷兵のことが次のように書かれている。文体の比較のために、ブリテンの引用も英語のまま示す。

Then I went back to the Hospital—back to one or two dressings that make even me almost sick—that of the man with the hand blown off & the stump untrimmed up, & the other man with the arm off, & a great hole in his back one could get one’s hand into, & other wounds on his legs & sides & head. Poor, poor souls! (408)

きわめて淡々と負傷者の状態を語っていても、ラ・モットやボーデンよりは控えめで、憐みの情はあっても、皮肉は感じられない。

1915年10月に第一ロンドン総合病院の兵卒と下士官の収容されている病棟で働き始めた時のことを、『青春の遺言』（以下引用は、断らない限り、「遺言」から）では、次のように回想している。初めて足が壊疽にかかった患者の手当てを手伝わされて、「骨がむき出しになって、ぬるぬるとした赤や緑の」傷を見て失神しそうになり、後で思い出して恥ずかしくなったと書いている。それに比して、この病院の職業看護婦は、落ち着いていて有能で、「高度な訓練を受けた看護婦だけがしばしば有しているあの憐みからの見事な免疫力に守られている」が、「自分自身の個性を組織の非人間的な日課に同化させてしまうことへ深い恐れ」（211）を感じている。この時点では、ブリテンは、「献身的な熱意」で日常の業務にあたるという「ナイーブな理想主義」（210）を信じていたと言える。

しかし、三年近くに及ぶ勤務の後、1918年の夏には、神経が衰弱した母を介護するために、北フランスの激戦地からイギリスに戻ってくる。9月から一時的に軍事病院ではなく、意に染まない市民病院に勤務することになった時には、心境の変化が見られる。自分が大切にしていたものを奪ってしまった「神と王と国」という「貪欲なトリオ」に忠誠を捧げる気持は失せ、完全に機械になってしまうことの方を望むようになっていく。

My only hope now was to become the complete automaton, working mechanically and no longer even pretending to be animated by ideals. Thought was too dangerous; if once I began to think out

exactly why my friends had died and I was working, quite dreadful things might suddenly happen. ... I might even murder my Ward-Sister or assault the distinguished ecclesiastic. On the whole it seemed safer to go on being a machine... (450)

副看護婦長 (Ward-Sister) に腹をたてた拍子に辞める決意をし (455)、10月からは、ロンドン、ミルバンクにある軍事病院、アレクサンドリア女王病院に転職する。完全な自動人形になるのはここにおいてである。

Having become, at last, the complete automaton, moving like a sleep-walker through the calm atmosphere of Millbank, I was no longer capable of either enthusiasm or fear. Once an ecstatic idealist who had tripped down the steep Buxton hill in a golden glow of self-dedication to my elementary duties at the Devonshire Hospital, I had now passed—like the rest of my contemporaries who had survived thus far—into a permanent state of numb disillusion. (458)

ラ・モットやボーデンのように、自動人形になって無感覚になることが病院で働き続けるのに必要なことであることを、ブリテンは戦争が終わろうとする時になって悟った。これは、ちょうど戦線で戦う兵士が仲間の死に次第に無感覚になるのに似ている。婚約者のローランドが話したことを、ブリテンは日記 (1915年8月22日) に書いている。ローランドは、塹壕で死んだまま放置された兵士の足がだんだん黒くなるのを見ても、毎日見ているので、何も感じなくなるが、この無感覚 (callousness) は、人間が後天的に獲得した戦時の必要性であると説明する。これに対して、ブリテンは、自分が愛する人の苦しみに無感覚になることはない、と言っている (318)。無感覚は、神経が参らないために働く防御装置のようなもので、第一次世界大戦で蔓延した「シェル・ショック」という症状は、この装置が適切に働かなかつたために生じたと言えるのではないだろうか？

ブリテンの『青春の遺言』がベスト・セラーになり、今も読まれ続けているのに対して、ラ・モットやボーデンの手記はヴィラーゴ・プレスから再版されてもいない。また、ブリテンはモダニストの系譜に入れられているとは思えない。この違いは、ラ・モット、ボーデンによる病棟の描写が、おぞましさを引き出すことに集中しているのに対して、ブリテンの方は看護を通じて戦争の現実を知り、名誉や栄光や犠牲といった言葉で戦争を美化することの虚偽に気づき、戦後は平和主義者になっていくという、展開がある。伝統的な自伝の語りの中に病院の体験が盛り込まれていて、人々の共感を得やすい。ブリテンの自伝は、大戦期に青春を過ごした世代が、戦後の冷めた世代に残したメッセージでもある。タイリーによれば、イギリス人であるブリテンは、大戦は世界を浄化するための聖戦であるとする帝国主義的プロパガンダに同調して志願したが、ニュージーランド人であるキャサリン・マンズフィールドやアメリカ人であるラ・モット、ボーデンはそのようなレトリックに対抗し、非人間的な戦争の機構の犠牲者としての兵士を提示するために、皮肉で風刺的な文体を用いたと論じている。<sup>17)</sup> 愛する人達を戦争で失ったブリテンは、アウトサイダーの立場で兵士の苦痛や死を突き放して見ることはでき

ず、自伝を書くことで、戦争の崇高な側面とおぞましい側面の両方を結びつけた紙碑をつくりあげたと言える。

## V.

直接戦闘に従事した男性の経験こそが、語るに足る真の戦争体験であるという認識が従来支配的であった。男は戦いで死ぬが、女はそうではない。しかし、「第二の戦場」も、生と死の境界での戦いが行われる場であり、医者や看護婦や看護兵も戦闘員と同じように、戦争のトラウマを経験していることが取り上げられるようになってきた。彼らの日記や体験記が研究され、「戦時のトラウマのもう一つの歴史」が書かれ始めていることを、ヒゴネットは指摘している。<sup>18)</sup> 三人の看護婦達の手記に見られた「自動人形」化は、辛うじて精神的な崩壊をくい止めているが、やはりこれ自体トラウマの一症状と言えるのではないだろうか？彼女達は「人間の残骸」の悪夢に憑りつかれ、シュールリアルな病棟の記憶におびえている。

従軍経験のある男性は、軍隊を男同士の友愛の場として懐かしんだり、戦闘を勇気や武勲や時には喜びと結びつけてとらえることが多い。戦争は精神的・肉体的な苦痛と同時に、ロマンと興奮、満足も与えてくれると考えられている。ところが、「第二の戦場」では、男性性の高揚した側面は霧散し、正視に耐えない醜悪さがあるのみである。戦友としての男同士の絆は、神経衰弱に陥ることから戦闘員をある程度救ったと言われているが、引き裂かれた戦友の身体を見たり、銃剣で敵を殺したりした経験は、精神的な動揺や譫妄だけでなく、立ち上がれない、ちゃんと歩けない、物が言えない、チック、吃音等々様々な身体的障害を引き起こした。第一次世界大戦中に交戦国で蔓延したこれらの症状を、1916年2月『ランセット』誌上で、イギリスの精神科医チャールズ・マイヤーズ (Charles Myers) が「シェル・ショック」と名づけて以来、頭韻を踏み印象的なこの英語は今も使われ続けている。砲弾の炸裂する場になかった者も罹患しているし、心理的な症状は時間をかけてゆっくり現れることが多く、「ショック」というのにはあたらぬので、マイヤーズ自身後で認めているが、医学的には不正確な用語であった。<sup>19)</sup> 物理的な炸裂が原因でないとすれば、断片と化した身体が応急処置を施されただけで運び込まれてくる、前線近くの救護所や野戦病院で任務にあたる医療看護従事者も、この症状から無縁ではありえない。戦闘員と非戦闘員、男と女の区別なく起こり得たというのが、最近のトラウマ研究の見解である。

ジェンダー化された「シェル・ショック」も「記憶過剰」に分類される大戦の副産物であった。大戦中から戦後にかけて、このわけのわからない病気の原因や治療法をめぐって医学界の論争があり、軍隊では、臆病からくる詐病と考えられて銃殺刑にするケースもあり、政治家や一般人を巻き込んだ議論が白熱化した。戦前の列車事故や工業災害の被害者に見られる症状と似ていたため、何らかのショックが原因であると見なされた。また、前世紀から問題になっていた、都市のエリート階級が主に発症する「神経衰弱」(neurasthenia) や女性特有のヒステリーの一種とされ、前者は将校、後者は兵卒に多い症状であると考えられたりした。日露戦争でも多くの軍人が神経症状を発症しているが、第一次世界大戦でその数が劇的に増えたのは、戦争の規模の拡大や殺戮兵器の進化といった「インフラストラクチャー」の変化によるだけで

はなかった。軍隊の士気を高める「スーパーストラクチャー」の強化—軍部は「シェル・ショック」を「合法的な損耗人員 (casualties)」と認めようとしなかった—が数多くの犠牲者を出す原因になったと考えられている。<sup>20)</sup> 1922年に陸軍省が国会に提出した「シェル・ショック」についての報告書 (*Report of the War Office Committee of Enquiry into "Shell Shock"*) は、破壊的な近代戦争が引き起こした特殊な疾患であることを認め、詐病の汚名は少なくとも晴らされた。その後、第二次世界大戦でも“combat fatigue”と呼ばれる症状が現われ、ベトナム戦争の場合には退役軍人は社会に復帰できないほど深刻な症状を示し、1986年になってアメリカ精神医学会がPTSD (Post-Traumatic Stress Disorder, 心的外傷後ストレス障害) という疾患の一つとして認定するに至った。これにより、「シェル・ショック」は、震災や性的虐待等が引き起こす集団または個人のストレスと同じように、トラウマ的な記憶と関係していると見直されることになったのである。イギリスがこの見解を受け入れたのは、フォークランド紛争が終わって四年後の1986年で、これによって、この紛争や北アイルランド紛争の退役軍人達が補償を求められるようになった。<sup>21)</sup>

こうした医学的な認定とは別に、大戦の終わる頃から、「シェル・ショック」は詩人や作家からより広い文化的意味合いを付加されてきた。戦争詩人のウィルフレッド・オーウェン (Wilfred Owen) とシーグフリード・サスーン (Siegfried Sassoon) は共に「シェル・ショック」に罹ったとされ、エジンバラのクレイグロックアート軍事病院に一時収容され治療を受けている。すでに有名な詩人であったサスーンに、オーウェンが初めて出会い、自分の詩を見てもらったのはここであった。休戦の一週間前に戦死したオーウェンの詩を、サスーンは1920年に詩集として出版している。その中に、「シェル・ショック」に罹った兵士について書いた詩がある。

Who are these? Why sit they here in twilight?  
Wherefore rock they, purgatorial shadows,  
Drooping tongues from jaws that slob their relish  
Baring teeth that leer like skulls' teeth wicked?  
.....  
— These are men whose minds the Dead have ravished.  
Memory fingers in their hair of murders,  
Multitudinous murders they once witnessed.  
Wading sloughs of flesh these helpless wander,  
Treading blood from lungs that had loved laughter.  
Always they must see these things and hear them,  
Batter of guns and shatter of flying muscles,  
Carnage incomparable, and human squander  
Rucked too thick for these men's extrication. (146)

「精神を病んだ男達」(“Mental Cases”)と題されたこの詩は、1918年の5月から7月の間に書かれた。身体を揺すぶり、舌を垂らし、歯をむき出した患者は、(マクベス夫人のように)目撃したおびただしい数の殺人を記憶にとどめていて、死者達によって心を凌辱されたようなものだと言っている。オーウェンの詩は、大戦後から現在においても、イギリスの人々に第一次世界大戦を「悲哀」ととらえる見方を植え付けた。ブルックのような犠牲や愛国心が人の心をつかんだのは大戦が始まってからの短い間だけであった。

サスーンも1917年10月にクレイグロカートで書いた「生き残り」(“Survivors”)という短い詩に、「シェル・ショック」のために、どもったり、支離滅裂な話をしたりする兵士たちについて書いている。

They'll soon forget their haunted nights; their cowed  
Subjection to the ghosts of friends who died, —  
Their dreams that drip with murder; and they'll be proud  
Of glorious war that shatter'd all their pride. . . (90)

死んだ戦友の亡霊と殺人のしずくがしたたる夢が、彼らの症状の原因になっていることが語られ、「輝かしい戦争」が実は彼らのプライドを粉々にするものであったとサスーンらしい皮肉が続く。戦争に対する深い幻滅と憤りがサスーンの詩の基調にある。

二人の詩人は、共に「シェル・ショック」の原因を兵士が見た殺人の記憶と結びつけている。戦闘で目撃した死体の記憶が悪夢のフラッシュ・バックを生み出す。サスーン自身も戦死体がロンドンの通りで見える症状を訴えている。歴史家のジェイ・ウィンターは、大戦を懐古して2006年に出版した本の中で、「シェル・ショック、記憶、アイデンティティ」という章を設け、「シェル・ショック」を「埋め込まれた記憶」と呼んでいる。たとえば、銃剣で敵を殺した男があごの不随意運動を起こしているとすれば、それは、彼の身体がそれを記憶していて、身体が彼のしたことを物語っているからだという。戦闘の近くにいたという経験だけでも、その記憶が身体の中に埋め込まれて、それと同化することができず、アイデンティティも失わせるものであると述べている。<sup>22)</sup> 男のものとしてジェンダー化された「シェル・ショック」は、帰還した「シェル・ショック」の将校についてのフィクションや、男らしさの喪失と関連させる研究書によって広められ、今なお「シェル・ショック」は大戦の記憶と教訓として、医学的、文学的、文化的に表象され続けている。

## VI.

「シェル・ショック」の帰還将校を最初に小説に登場させたのは、レベッカ・ウェスト(Rebecca West)の『兵士の帰還』(*The Return of the Soldier*, 1918)であった。この将校は自分の結婚生活のことを全て忘れ、十五年前の恋人のことしか覚えていないという「記憶喪失」がその症状である。家族や精神科医の協力で、最後には彼は「治癒し」、「隅から隅まで兵士」の自動人形となって戦場に戻っていくが、<sup>23)</sup> ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)の『ダロウエ

イ夫人』(Mrs Dalloway, 1925)の「シェル・ショック」の帰還兵は、精神科医に診てもらいに行ったところで、飛び降り自殺する。注目すべきは、この軍人と縁もゆかりもないダロウェイ夫人が、たまたまパーティ会場でこの自殺の話聞いて動揺し、自殺した若者と自分とが似ていて、彼が一思いに死んでしまったことを嬉しく思うというところである。ダロウェイ夫人はシェル・ショックに罹っているわけではないし、若者とは境遇も異なり何の接点もないように思われるが、戦後の幻滅を共有していることでは同じである。タイリーは、フェミニストの立場から、男も女も軍国主義社会の犠牲になっていることをウルフは語ろうとしていると述べている。<sup>24)</sup>シェル・ショック患者の帰還が、家族や銃後の人々に深刻な影響を与えることをこれらの女性作家の小説は告げているだけでなく、「シェル・ショック」と言えば、将校階級、戦後の幻滅、男性のアイデンティティの喪失という連想を強めることになった。<sup>25)</sup>しかし、退役軍人達が語り始めたのは、戦後十年経ってからで、1929年になってようやく手記や回顧録や小説や、手紙・日記の選集を出版し始め、戦争本ブームが起こる。これは、彼らが銃後の人達も自分達と同じように戦争の惨めな犠牲者であることを認められるようになったからであろう、とキャリントンは推測している。<sup>26)</sup>

銃後の人達も傷つき、戦争からくる神経症を発症していたことを、フェミニスト批評家は取り上げ始めた。テイトは、『モダニズム、歴史、第一次世界大戦』(1998)の「市民の戦争神経症」という節に、作家のHD(Hilda Doolittle)が市民も兵士と同じように戦争神経症に罹り得ることを作品に繰り返し書いていることを、まず取り上げている。そして、戦場体験のない市民も戦場のニュースを聞いたり、死の場面を思い浮かべたり、出征した息子の死を聞いたりすることによって、ストレスにさらされ、神経が衰弱する例を挙げている。医学雑誌『ランセット』もこの事実を受け入れ、市民がさらされている戦争神経症にも配慮と適切な治療が必要であると論じている1916年3月(「シェル・ショック」がマイヤーズによって命名されたのは、2月のこと)の記事を紹介している。テイトは、文学作品からも市民が戦争神経症的症状を示す例(『兵士の帰還』の語り手自身もこの例に含められている)を挙げ、「シェル・ショック」は兵士よりも市民に多いことを示唆したジョン・バカンの小説や、アーノルド・ベネットが戦場視察から帰って神経症を発症したこと等の例を次々と記している。<sup>27)</sup>また、タイリーも、首相夫人のシンシア・アスキスが息子や夫の安否を心配するあまり、狂気にも似た精神的虚脱状態に陥ったことや、平和運動を推進しようと積極的に活動していたキャサリン・マーシャルやエセル・スノードンさえも、絶望感と精神的な麻痺を経験していると述べている。<sup>28)</sup>

命をおびやかす大きな出来事の後で、精神的なショックがトラウマとして身体に刻みつけられてさまざまな症状を引き起こすというPTSDの定義からすれば、戦場の場になかった市民が「シェル・ショック」に罹ったとしても不思議はない。「序」で述べたように、民間人の苦痛は「記憶喪失」の状態にあっただけなのである。軍医や看護兵や看護婦等の非戦闘員達も「シェル・ショック」症状を呈していたことは、最近ようやく歴史家や研究者の間で研究され始めた。極度の疲労状態にあり、死と損傷した肉体を始終目にし、恐怖と義務感の板挟みになっていることでは戦闘員と変わらず、おまけに医療従事者の場合には、戦場へ戻すために患者を治すことや、トリアージをすることに対する倫理的な葛藤にも苛まれていた。<sup>29)</sup>ラ・



モット、ボーデン、ブリテン等の看護婦の手記にある無感覚、精神的麻痺は、精神がまいらないようにするための防衛装置であると同時に、それ自体が「シェル・ショック」、あるいは戦争からくるトラウマの症状と見なしても過言ではない。

「シェル・ショック」の「シェル」は、戦闘の場に限定してしまい、ふさわしい言葉ではないが、「ショック」という用語は、ラ・モット、ボーデンのモダニスト的な文体をよく示している。すでに見てきたように、反復、省略、断片化、単調、無感動、皮肉を特徴とする二人のナラティブは、モダニズムのキャンノンに匹敵する試みである。スミスが言うように、「第二の戦場」は文学的には戦争詩人達の「第一の戦場」に対抗するものとしての意味も持っている。<sup>30)</sup>「シェル・ショック」のメタファーは、文学と芸術の歴史に置き換えてみることができる。戦争の栄光と悲哀を綴る戦争詩人に対して、看護婦達はショッキングな病院のあり様をショッキングな書き方で表現した。言語を絶する現実をどう言葉に表現するかという彼女達の取り組みは、モダニズムやアヴァン・ギャルドが挑んだ言語の限界への挑戦につながる。たとえば、T. S. エリオットは、「プルーフロックの恋唄」(1917)で、「そうじゃない、私が言おうとしたのはそれじゃない！」とプルーフロックに叫ばせている。大戦が起こる前から、機械化や技術革新で一新されたモダンの世界が与える魅惑と幻滅を表現するのに、過去の上品な言葉では不十分であるというもどかしさをすでに芸術家達は共有していた。

二十世紀の最初の二十年の間に、イギリスやロシアも含めたヨーロッパ各地で、さまざまな文学や芸術のアヴァン・ギャルドが集結し、マニフェストを出して自分達の活動方針を宣言している。たとえば、イタリアの未来派の旗手マリネッティは、1909年に発表した「未来派宣言」で11カ条を挙げているが、そのうち3カ条を抜き出してみる。

3. 今まで文学は物思わしげな不動性、喜悦、眠りを称賛してきた。我々は攻撃的な行動、熱に浮かされた不眠、レーサーの速度、命がけの跳躍、パンチと平手打ちを称賛するつもりだ。
9. われわれは戦争を賛美する。それこそが唯一の健康法だ。軍国主義、愛国心、自由をもたらず者の破壊的な身振り、死ぬに値する美しい考え、そして女達への軽蔑を賛美する。
10. われわれは美術館、図書館、あらゆる種類のアカデミーを破壊し、道徳主義、フェミニズム、あらゆる日和見のあるいは功利主義的な臆病と戦う。<sup>31)</sup>

既成の価値観を破り、斬新な芸術の創造を目指すマッチョな試みである。1913年には、ロシアでも未来派が集結してマニフェストを出し、フランスではキュビズム、イギリスではイマジズム、ヴォーティシズム、スイスやドイツやフランスではダダイズム等々が戦前から大戦にかけて次々と威勢の良い芸術宣言を出した。大戦に先駆けてこれらの運動のいくつかやモダニズムが始まっていたのは、急速に工業化されて人口が増え、過去にはなかった速いテンポの都市生活が始まっていた背景があるからである。未来派は戦争が始まる前に失速してしまったが、上の宣言は、そうしたモダンの世界の速度と攻撃性を礼賛している。

一方で、管理された時間や新しいリズムについていけない人達は、ヒステリー、神経衰弱、鬱症状等の病を発症していた。「シュル・ショック」はその延長線上にあって、戦争とともに起こるべくして起こった障碍であった。精神的疾患を文学、言語の問題としてとらえ直すと、モダニズムの言語の実験は、大戦によって、「シュル・ショック」によって、決定的に新しくなったと言えるのである。戦争のトラウマが文学的、芸術的に昇華されたのが、モダニズムであり、アヴァン・ギャルドである。

シュルレアリスムは、上に挙げたアヴァン・ギャルド各派の運動と比べると遅く登場し、公式の始まりは1924年の第一宣言である。しかし、その中心になった芸術家達、アンドレ・ブルトン、ルイ・アラゴン等は軍医または看護兵として第一次世界大戦に従軍した戦争世代である。ブルトンはダダイズムにも参加し後に決別している。戦争の勃発と共に始まったダダは、戦争の恐怖と狂気を、既成の芸術の尺度に逆らって提示しようとした。アネット・ベケールは、「大戦がシュルレアリスト運動の創造者ではなかったとしても、確かにその触媒ではあった」と述べている。<sup>32)</sup> この言葉はシュルレアリスト運動だけではなく、モダニズムについてもあてはまると思われる。

## 終わりに

二人のアメリカ人の看護婦の手記がモダニズムの手法に似ているという議論から始め、大戦のトラウマ（「シュル・ショック」）がモダニズムやアヴァン・ギャルド運動に影響を与えたという結論によやくたどり着いた。最後につけ加えると、モダニズム運動はアメリカに主軸を置く運動ではないかということである。同じ看護婦の体験を書いても、アメリカ人のラ・モットやボーデンが強烈な瞬間の断片を並置させたり、感情をまじえずに耐えられない現実を表現しようとするのと比べると、ブリテンは実験的な手法を意識的に試みようとはしていない。モダニズム運動を率いたエリオットやパウンドもアメリカ出身である。ガートルード・スタインやHDもアメリカ出身でモダニズムの最前衛と言える。ヘミングウェイやフィッツジェラルドも含まれる。モダニズム運動は、大戦を抜きにしては語れないように、これらのアメリカ人を忘れることもできない。エリオットの第一詩集『ブルーロックとその他の観察』（1917）が、ダーダネルス海峡で戦死した友人ジャン・ヴェルディナルに捧げられていて、『荒地』（1922）の第IV部「水死」で弔われていることも、大戦に行かなかったモダニストにとって大戦がトラウマとなっている証である。「記憶喪失」のままにされてきたラ・モットとボーデンもモダニズムの系譜に連なることは確実であろう。そして、二人の体験記は、「記憶過剰」となった兵士の犠牲や功績を讃える戦争記念碑に対して、対抗記念碑（counter monument）としての意味を持っていると言える。

\* 本稿は、日本学術振興会2010年度科学研究費補助金による基盤研究（C）「ジェンダーから見た第一次世界大戦の表象」（課題番号22510291）の成果の一部である。また、2012年12月22日、日本英文学会関西支部第7回大会（於京都大学文学部）での口頭発表「苦痛を目撃することのトラウマ―第一次世界大戦の脇役たち」に一部基づいている。

\* 本論で取り上げた作品は、次に挙げる版による。本文には頁数だけ記した。

Ellen N. La Motte, *The Backwash of War: The Human Wreckage of the Battlefield as Witnessed by an American Hospital Nurse* (NY & London: G. P. Putnam's Sons, 1916)

Mary Borden, *The Forbidden Zone* (1929; London: Hesperus P, 2008)

Vera Brittain, *Testament of Youth: An Autobiographical Study of the Years 1900-1925* (1933; London: Virago, 1978)

\_\_\_\_\_, *Chronicle of Youth: War Diary 1913-1917* (1981; Glasgow: Fontana, 1982)

Wilfred Owen, *The Poems of Wilfred Owen*, Jon Stallworthy (ed) (London: Chatto & Windus, 1985)

Siegfried Sassoon, *Collected Poems 1908-1956*, (1947; London: faber and faber, 1961)

## 注

- 1) ジャン＝ジャック・ベケール、ゲルト・クルマイヒ『仏独共同通史 第一次世界大戦』(下) 剣持久木・西山暁義 訳 (岩波書店、2012年)、16頁。
- 2) 同書、182頁。
- 3) Janet S. K. Watson, *Fighting Different Wars: Experience, Memory, and the First World War in Britain* (Cambridge UP, 2004). Santanu Das, *Race, Empire and the First World War Writing* (Cambridge UP, 2011). Xu Guoqi, *Strangers on the Western Front: Chinese Workers in the Great War* (Harvard UP, 2011). 及び、注5の本等数多く出ている。
- 4) Samuel Hynes, *A War Imagined: The First World War and English Culture* (London: Bodley Head, 1990), 270.
- 5) James E. Kitchen, Alisa Miller & Laura Rowe (ed.), *Other Combatants, Other Fronts: Competing Histories of the First World War* (Newcastle upon Tyne, Cambridge Scholars Publishing, 2011)
- 6) Margaret R. Higonnet (ed.), *Nurses at the Front: Writing the Wounds of the Great War* (Boston: Northern UP, 2001), 'Introduction', viii.
- 7) Alice Dunbar-Nelson, 'Negro Women in War Work' in Emmett J. Scott, *Scott's Official History of the American Negro in the World War* (1919), 378.
- 8) Higonnet, op. cit. Claire M. Tylee, *The Great War and Women's Consciousness: Images of Militarism and Womanhood in Women's Writings, 1914-64* (Iowa City: U of Iowa P, 1990). Sharon Ouditt, *Fighting Forces, Writing Women: Identity and Ideology in the First World War* (London: Routledge, 1994). Angela K. Smith, *The Second Battlefield: Women, Modernism and the First World War* (Manchester: Manchester UP, 2000).
- 9) Gertrude Stein, 'The Autobiography of Alice B. Toklas' (1933) in Carl Van Vechten & F. W. Dupee (ed.), *Selected Writings of Gertrude Stein* (NY: Vintage Books, 1990), 149, 160.
- 10) Wyndham Lewis, *Blasting and Bombardiering: An Autobiography (1914-1926)*, 56. Jeffrey Myers, *Enemy: Biography of Wyndham Lewis* (London: Routledge, 1982), 72-4.
- 11) Tylee, 98の指摘による。
- 12) Tylee, 94. 1934年の再版につけられた、発禁の事情についてのラ・モットの弁明的序文を引用している。その中に 'back of the scenes' という言葉が見られる。戦争用語には劇場の比喩が多い。  
'*The Backwash of War* was first published in the autumn of 1916, and was suppressed in the summer of 1918. Until this happened it went through several printings, but the pictures presented—back of the scenes, so to speak—were considered damaging to the morale. ...'
- 13) Smith, 72.
- 14) Helen Zenna Smith (Evadne Price), *Not So Quiet... Stepdaughters of War* (1930; NY: Feminist P, 1989)
- 15) Ouditt, 7-46; Smith, 70-101; Jane Marcus, 'Afterword' to *Not So Quiet... Stepdaughter of War*; Higonnet, 'Authenticity and Art in Trauma Narratives of World War I', *Modernism / Modernity*, Vol. 9, No. 1, January 2002.
- 16) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (1929; London: Jonathan Cape, 1953), 162.
- 17) Tylee, 102.

- 18) Higonnet (2002), 92.
- 19) Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830–1980* (1985; Penguin Books, 1987), 167–8.
- 20) Eric Leed, *No Man's Land: Combat & Identity in World War I* (Cambridge UP, 1979), 165.
- 21) Wendy Holden, *Shell Shock: The Psychological Impact of War* (London: Macmillan, 1998), 160.
- 22) Jay Winter, *Remembering War: The Great War Between Memory and History in the Twentieth Century* (New Haven: Yale UP, 2006), 55.
- 23) Rebecca West, *The Return of the Soldier* (London: Virago P, 1980), 188.
- 24) Tylee, “Maleness Run riot” —The Great War and Women’s Resistance to Militarism’, *Women’s Studies Int. Forum*, Vol. 11, No. 3, 1988, 209.
- 25) Peter Leese, *Shell Shock: Traumatic Neurotics and the British Soldiers of the First World War* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002), 166.
- 26) Edmunds (Carrington), *Soldiers from the Wars Returning*, 252 quoted in Leed, 192.
- 27) Trudi Tate, *Modernism, History and the First World War* (Manchester UP, 1998), 11–4.
- 28) Tylee (1988), 207–8.
- 29) Higonnet (2002), 95.
- 30) Smith, 71.
- 31) Filippo Tommaso Marinetti, ‘Manifesto of Futurim’ in Vassiliki Kolocotroni, Jane Goldman, Olga Tucidou (ed), *Modernism: An Anthology of Sources and Documentation* (Edinburgh UP, 1998), 251.
- 32) Annette Becker, ‘The Avant-garde, Madness and the Great War’ in *Journal of Contemporary History*, Vol. 35 (1), 2000, 71.

(原稿受理日 2013年3月4日)